



落語家

柳家三三さん

「三三」と書いて「さんざ」と読む。柳家小三治の弟子にして、数々の賞を総ナメにしてきた若手落語家のホープである。本格派の古典落語を聞かせる傍らで、落語映画「しゃべれどもしゃべれども」の落語指導や、落語漫画「どうらく息子」の落語監修もする。

上野・鈴本演芸場でトリをつとめた寄席がはねた後、インタビューをさせていただいた。そこでわかった落語家と弁護士の意外な共通点とは…。(聞き手・構成：伊藤 敬史)

——柳家小三治師匠に弟子入りしたのは、なぜですか。

フィーリングです。初めて寄席に行ったときに、うちの師匠が出ていて、それから他の人もいろいろ聞いたんですが、僕にとって一番いい時間を過ごせるのが、うちの師匠のしゃべっているときでした。

——弟子入りをしたのは、いつですか。

最初は、中学2年のときに、うちの師匠のところ、中学を出たら弟子入りしたいと頼みに行きました。そうしたら、師匠に「今どき、噺家になろうとする奴は、高校くらい出ておくもんだ」と言われました。あとで聞いたら、その場しのぎだったんですけど(笑)。

高校3年のときに師匠のところに行って、「4年前に来たんですけど」と言ったら、師匠に「本当に来たんだ」って顔をされました(笑)。それで、師匠もしょうがないなあという感じで、高校を卒業して弟子入りしました。

——中学生で弟子入りを考えるというのは、すごいですね。

どうすれば勉強しないで済むかと考えたんです。勉強しないためには義務教育が終わったら学校に行かなければいい、学校に行かないためには就職をすればいい、就職するには一番興味のある落語かなあと(笑)。

そのときは、噺家になったら落語をしゃべらなければいけないということを、あまり考えていませんでした

(笑)。あと、噺家になったら、勉強しなくていいけど、落語を覚えなければいけないということも考えていなかった(笑)。

——中学生で弟子入りのお願いをするって、勇気がいられますよね。

行きたくない高校に行く方が、勇気がいられます(笑)。

——弟子入りのお願いって、どうやってしたんですか。

中学のときは、手紙を出したんですよ。普通は、手紙で弟子入り志願なんてしても、返事を出さないんでしょけど、そのときは、「中学2年生？」ということ、親を連れて会いに来なさいということになったんです。親を連れて来なさいというなら、弟子入りできるんだと思って行ったら、ダメでした(笑)。

高校のときは、3年生の2学期の期末テストの日に、東京に行って、師匠の家の前に2日くらい立っていたんですが、師匠に会えなかったので、寄席に行って、楽屋口から入って師匠と話をしました。

——高校では、落語研究会(落研)に入らなかったんですか。

僕ね、人前でしゃべるの、苦手で、あまり好きじゃないんですよ(笑)。落語だけは、こんなに面白い噺があるなら自分が面白いと思うようにやりたいと思っ

たんですけど、噺家になる前に人前でやらなくていいや、恥ずかしいしと思ったんです。

——小三治師匠の影響を受けていると思うことはありますか。

ありますね。あまりお酒を飲まないとか、噺家のくせに無愛想とか（笑）。

——落語の稽古って、どうやってするのですか。

基本的には、そのネタを持っている人のところに教えてもらいに行くんです。三べん稽古と言って、そのネタを持っている師匠が三回話してくれて（今はテープを使ったりしますが）、それを覚えて、今度はその師匠の前で自分が話して、直してもらうんです。何度かやって、OKが出たら、はじめてお客さんの前でやっ
ていいということになります。

ちなみに、僕は、うちの師匠に稽古をしてもらったことは1回もなく、他の噺家に稽古をつけてもらいました。うちの師匠も、五代目小さんに面と向かって教わったことはないです。うち以外は、たいがい自分の師匠に教わるんですけどね。

あとは、僕の場合、言葉に出してしゃべるよりも、頭の中で、落語の世界と一緒に暮らしているように泳いでいる時間が一番長いです。その時間が長いと、その噺の世界にじっくりとなじんできます。

——自分なりにアレンジを加えるんですか。

面と向かって教わっても、そのままにはやりません。いろんな可能性を考えた上で、ベストの選択がそのままだと判断することはありますが、頭からそのままやるうとはしません。

もちろん、最初のうちは、うまい人の噺をそのまま暗記して、自分の中である程度の基礎を作るんですけどね。それができたら、今度は自分に向いているやり方を見つけることになります。

——3年目で二つ目になって、13年目で真打ちになったということですが、二つ目のときは、早く真打ちになりたいと思っていましたか。

そういう気持ちもありましたけど、今、真打ちにさせられても困るなどというのもしませんでしたね。

——弁護士の独立と似ていますかね。

真打ちになると、披露興行でトリをとるということになります。実際にその日になると、自分がしゃべった後に誰も出てこないのかと思うと、お客さんに自分を見て満足してもらわないといけないのか、それはこわいなって思いましたね。

——真打ちになると、自分の看板で仕事をしなければいけないわけですね。やっぱり弁護士の独立と似ていますね（笑）。

そうですね。真打ちになると、自分の落語の魅力で仕事がなければなりませんからね。仕事ができる方法は、いろいろありますが。

人と人とのつながりで、「あいつ、落語家として、かわいがりたいよね」っていうことで、「あいつを呼んで、やってもらおうよ」っていうこともあります。また、「あいつ、人間は嫌いだけど、落語がおもしろいから呼ぼうよ」っていうこともあるでしょうね。

——人と人とのつながりで仕事ができるっていうのも、弁護士と一緒ですね。

なんだかんだ言っても、人と人とのつながりは大きいですね。

——三三師匠は、小三治師匠の何番目の弟子ですか。

9人残っている中の8番目の弟子ですね。本当は、20人以上入門して、半分以上、クビになっているんですけど。

——そんなに厳しいんですか。

うちの師匠は、昔は相当きつかったらしいですよ。今はやわらかくなりましたけど。

うちの師匠は、若いうちから売れたので、若いうちから弟子がきますよね。そうすると、「あんなに若いのに弟子をとるから、ダメなんだよ」っていう周りの目がありますし、自分が恥をかくと、師匠の小さんにも恥をかかせるという感覚もありますから、厳しくせざるを得なかったんでしょうね。あとは、うちの師匠も若かったので、噺家とはこうあるべきだという固い志があったんでしょうね。

それが、何人も育ててくると、「人は、思い通りには

育たない」っていうのがわかってくる（笑）。弟子に育てられたっていうか、人間的に練れてくるんでしょうね。

——それも弁護士の世界に似ている気がします（笑）。

うちの師匠は、自分の思い通りに育てるんじゃなくて、人を見て、言うことを変えますね。この人には、いつ、どのタイミングで、何を言ったら効果的なんだろうということを考えているんでしょうね。

——先ほど、小三治師匠には落語の稽古をつけてもらったことがないということでしたが、どういうところで師匠から教わるんでしょうか。

落語を教えるっていうのは、世間でいえば、学校で勉強するみたいなものでしょう。でも、実際には、学校で教わる勉強ではなくて、人生経験みたいなものの方が重要ですよ。

うちの師匠は、それを「人生とは…」と語るのではなくて、自分がどう生きているのかを弟子に見せています。手取り足取り教えるのではなくて、見て、感じて、自分なりに何とかしてねというのが、うちの師匠の育て方です。うちの師匠自身も、コーチ専属ではなく、現役ですからね。自分が現役としてやっているところを見せていくしかないと思っていますよ。

落語の技術や、落語の噺を教えることが、一番大事なことではありません。そういうことは、教えなくても、自分でやる奴はやる。弟子・師匠として、もっと大事なことがあると思っていますのでしょうね。

——実際、どのように学んでいったんですか。

うちの師匠が男と話すのが嫌いで、僕が無口なので、基本的に会話はなかったですね（笑）。

うちの師匠がふだん人と話したり、行動しているところを見て、どんなふうにと話しているか、どんな基準で動いているか、何を美意識として持っているかを感じました。そこから、経験したことのないことについても、こんなふうに対応していけばいいんだろうということを学んでいくんですね。

手取り足取り一から十まで教えられると、いざというとき、自分でどうしように対応する力はなかなか育ちませんね。

——それも弁護士と似ていますね。

人の相手を密にしていく職業であることにかわりはないですからね。

何かを介在して人の相手をしていくというところもありますね。例えば、弁護士さんは、法というものを通して、あるいは案件を通して、人の相手をしていくわけですよ。僕らも、落語というものを通して、人に喜んでもらう仕事です。似たような図式があるのかもしれないですね。

——ところで、寄席で当日何を演るかはどうやって決めるんですか。

寄席に来て、前の人が話すまでは、自分の噺が確定しないんです。

例えば、今日ですと、8時過ぎに高座に上がりましたが、7時40分頃に楽屋に入りました。それで、初めに「子ほめ」って噺が出ましたよというと、人に教わって失敗する噺は候補から消します。「生徒の作文」っていう噺が出たので、字が読めない、書けないというジャンルは消える。「蜘蛛駕籠」っていう噺が出たので、旅の噺は消える。「麻のれん」っていう噺が出たので、目の見えない人の噺や、お酒の噺は消える。という具合に消去法にしていきます。で、高座に上がってから、どうしようかなと思って…（笑）。

——高座に上がってから決めるんですか。

3つくらい候補を考えておいて高座に上がってから決めることもあれば、噺を決めてから上がることもあります。ただ、噺を決めていた場合でも、高座に上がって、まくらをやっているときに、今日はこの噺は向かないと思ったら、変える余地は残しておきます。

——今日は「不動坊火焰」という噺でしたが、どうしてこの噺を選んだのですか。

今日は、僕がトリで、僕を目当てに来ているお客さんが多いので、むこう何ヶ月かの東京近郊の独演会で演った噺は避けようと考えました。そうすると、この噺は何年も演っていないので、お客さんが聞いたとしても久しぶりだろうということで、「不動坊火焰」を第一候補にして、高座に上がりました。

言葉に出してしゃべるよりも、頭の中で、
落語の世界と一緒に暮らしているように泳ぐ。
僕の場合、その時間が長いと、
その囁の世界にじっくりとなじんできます。

柳家 三三



— 何年も演っていない噺をいきなりできるっていうのが、すごいですね。

普通は、そういう乱暴なことはしないんですけどね。最近独演会が多くてそれと重ならないようにしなければいけませんし、寄席の場合には、当日来てみるまで他の人が何を話すかわかりませんから、そういう危なっかしいこともあります。

— 今日のお客さんはやりにくいなあというときは、どうするんですか。

うーん、あきらめる(笑)。その場合は、自分のやることに没頭するんですかね。

あるいは、本当に何とかして、笑ってもらおうとする場合もあります。客席をいじったり、客席を気にしていないような素振りをして客席のことを言うとか、いろんな手を使います。それでもダメなら、本当にあきらめます(笑)。

— 落語の中には老若男女いろんなキャラクターが出てきますが、その演じ分けというのはどうやってするんですか。

声は、基本的にはあまり変えません。女だからシナを作るとか、子どもだから甲高くというのは、気持ちが悪いですから(笑)。

この登場人物は、こういう話し方をすると、こう聞こえるという形はあります。あとは、形よりも、本人がその気になってしゃべるということです。

その登場人物は、初めてその場面に遭遇して、この先どうなるか知らずにしゃべっているわけですから、決められた台詞をしゃべるだけでは生き活きとしてきません。そのキャラクターの心を伝えるための手段の

一つとして演じ分けるので、演じ分けることが目的ではありません。

— 登場人物の気持ちが大切ということですね。

我々のいる柳家の教えは、まず登場人物の気持ちになる。そうすると、表現は後からついてくるというものです。これが、三遊亭では、ちゃんとした表現を身につけると、そのうち心も自然と入ってくると教えます。行き着くところは一緒なんですけど、どっちからいこうかが違うんですね。

— 落語の魅力をより多くの人にわかってもらうために、どうすればいいとお考えでしょうか。

落語は、何もなくて話して、聞いた言語から、頭の中に映像を作るわけですから、そういう作業が好きで嫌いな人に分かれます。

ただ、映像としての情報がないところで、自分で映像を想像して楽しめると、笑った量としては漫才とかコントより少ないかもしれないですけど、自分の中の満足度は高いということはあると思いますよ。そういう魅力をよりどころにしていくということでしょうね。

プロフィール やなぎや・さんざ

1974年7月4日生。本名は蛭田健司。神奈川県小田原市出身。落語協会所属。神奈川県立小田原高等学校卒業。1993年3月、10代目小三治に入門。1993年5月、楽屋入り「小多け」を名乗る。1996年5月、二つ目昇進し、「三三」と改名。2004年、につかん飛切落語会若手落語家「大賞」受賞。2005年、花形演芸大賞「銀賞」受賞、につかん飛切落語会若手落語家「奨励賞」受賞。2006年、3月真打昇進、第11回林家彦六賞受賞。2007年、第62回文化庁芸術祭大衆芸能部門「新人賞」受賞。2008年、「彩の国落語大賞」受賞。2010年、「花形演芸大賞」大賞受賞。